

## 無助詞名詞の統語的機能 —平安期散文資料を中心に—

山田昌裕

本発表で扱う無助詞名詞とは、格助詞、副助詞、係助詞などが下接しない名詞のことである。研究の目的は、平安期の無助詞名詞が情報伝達上どのような統語的成分として振る舞い、どのようなシステムで運用されていたのかを明らかにすることである。

無助詞名詞の実態として次の a～c が明らかとなった。a. 無助詞名詞 22052 例のうち、ガ格は 14680 例 (66.6%)、ヲ格は 6563 例 (29.8%)、計 21243 例 (96.3%) となっており、原則として無助詞名詞はガ格かヲ格であると言ってよい。b. 有生名詞は全体の 6138 例のうち、ガ格が 5477 例 (89.2%)、ヲ格が 609 例 (9.9%) となっており、有生名詞はガ格に偏り、ヲ格にはなりにくい。無生名詞は 15914 例のうち、ガ格が 9203 例 (57.8%)、ヲ格が 5954 例 (37.4%) となっており、無生名詞はガ格が優勢ではあるものの、ヲ格も少なからず存在する。c. 無生名詞ガ格は非対格自動詞文、形容詞文の主語 8684 例 (94.4%) となっている。一方、有生名詞ガ格は他動詞、複文主語、非対格自動詞、非能格自動詞など多様な述語成分と関係している。

a～c の実態より、無助詞名詞の統語的運用システムは、次のようになっていると思われる。格の標示がないということから、無生名詞はガ格行為者ではなく（つまり他動詞目的語、非対格自動詞主語、形容詞主語）、有生名詞はヲ格対象ではない（つまり他動詞主語、非能格自動詞主語、非対格自動詞主語、形容詞主語）という、いわば消極的な振る舞いをする。しかし、ヲ標示というオプションも存在し、情報伝達上の支障はなかった。無生名詞、有生名詞の振る舞いが重なるガ格非行為者（つまり非対格自動詞文主語、形容詞文主語）はいずれも一項述語なので、やはり情報伝達上の支障はなかったものと思われる。このような運用システムがあったからこそ、平安期にはガ格項を表示する専用の助詞の必要性がなかったと考えられる。